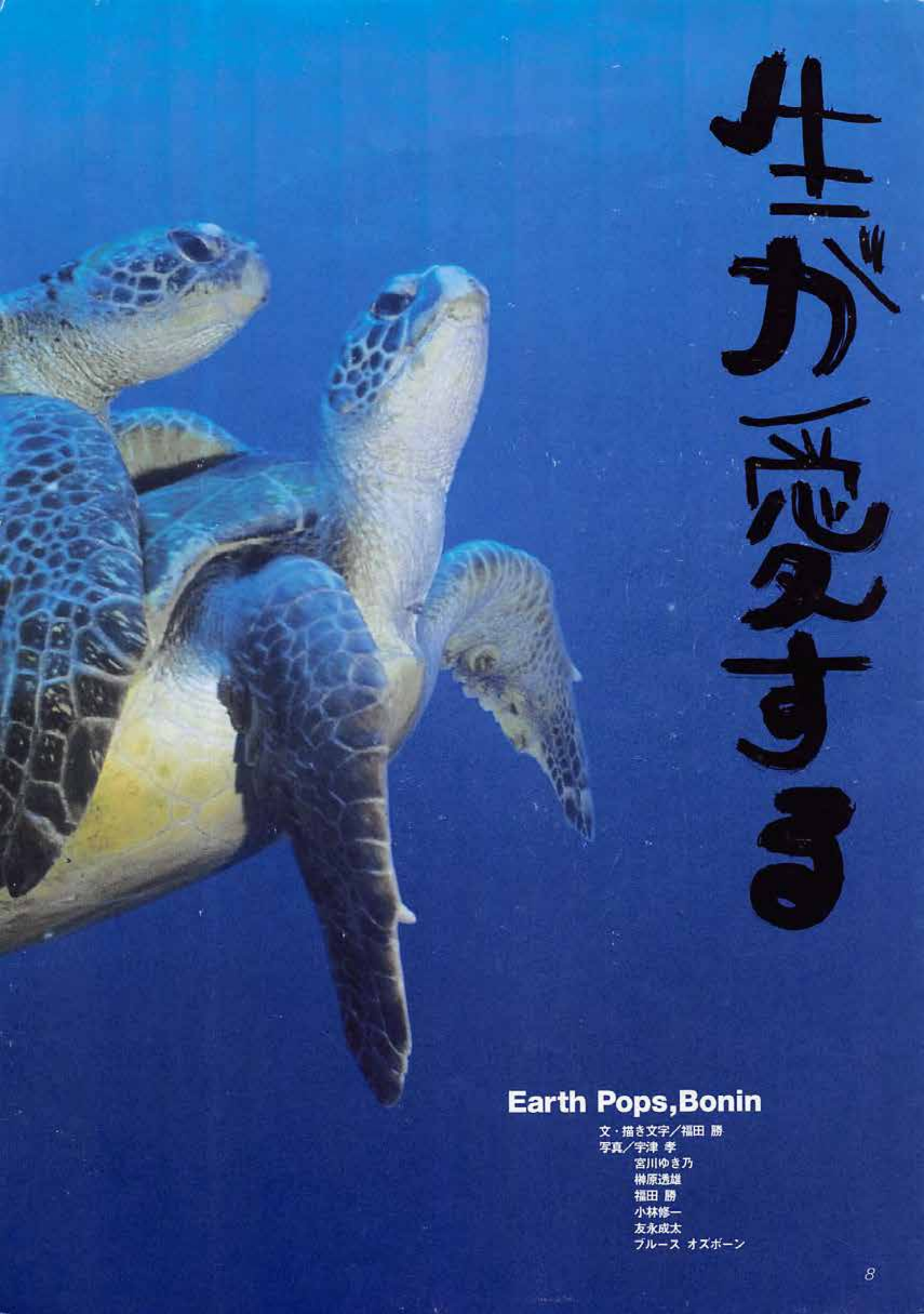


生命(いのち)を愛する

Earth Pops,Bonin

文・描き文字／福田 勝
写真／宇津 孝
宮川ゆき乃
榊原透雄
福田 勝
小林修一
友永成太
ブルース オズボーン

Dance,Bonin
ダンス小笠原 58

Made in Bonin
メイド・イン・小笠原 60

Native Spirit,Bonin
原始力 人間力 66

My Bonin Blue
潜って恋して 恋して潜って ジャック・マイヨール 78

Love,Bonin
小笠原を東洋のガラパゴスに／石原慎太郎 東京都知事 26
恋する島へ／宮武 希 リングリンクス ボーカリスト 64
小笠原島／佐藤四郎 サトウハチロー記念館長 76

Tourism,Bonin
生旅小笠原 130

Map
父島列島 129

Spots
父島スポット 127

Guide
父島ガイド 121

Map
大村
宮之浜・清瀬・奥村
境浦・扇浦・小港 99

Map
母島列島 97

Spots
母島スポット 95

Guide
母島ガイド 91

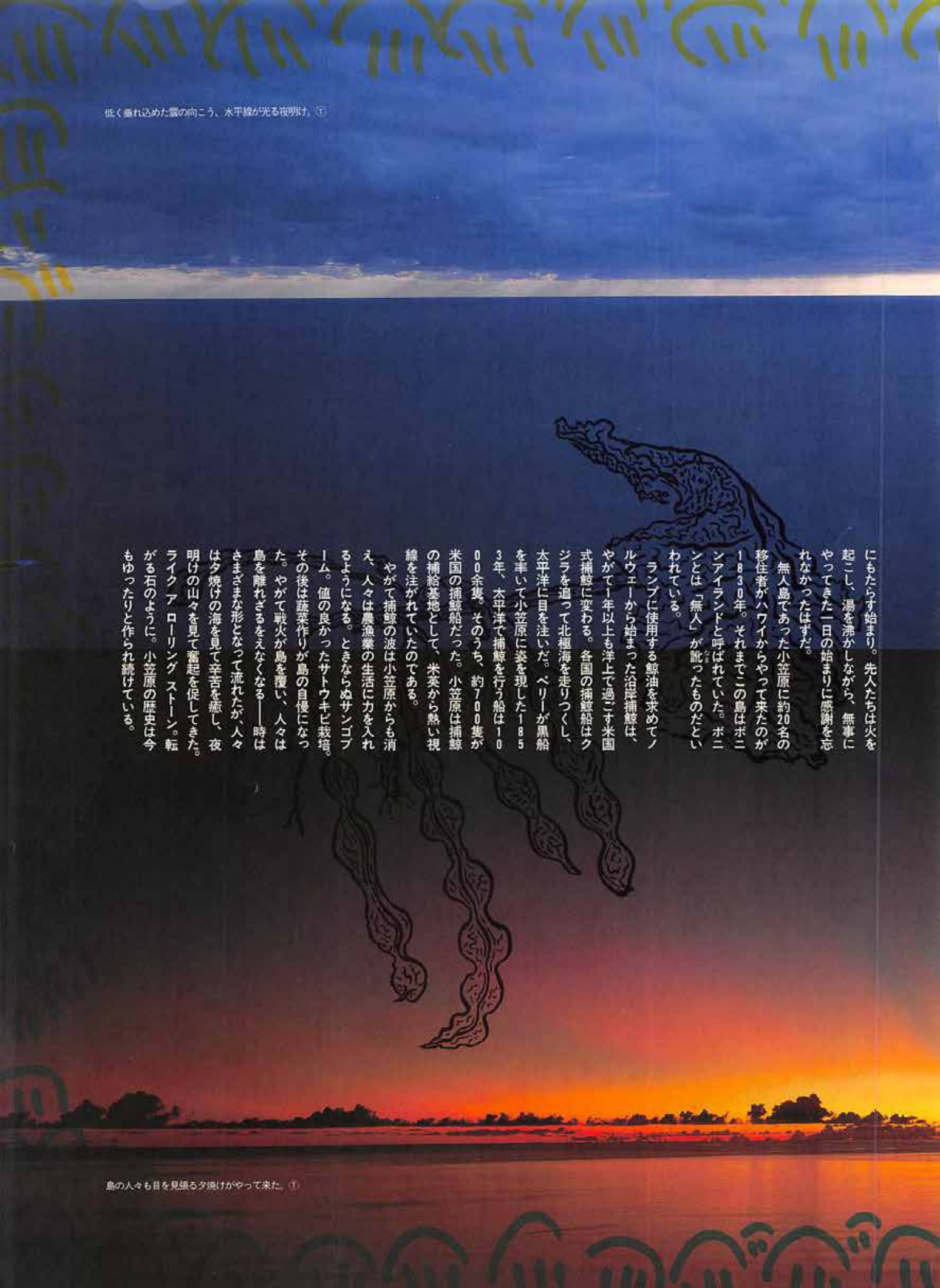
Map
沖村周辺 83

小笠原全ガイドはp.130から始まります(p.83まで)。
後ろからお読みください。

CONTENTS・海のなか／布にインクジェット 1300ミリ×1600ミリ／福田 勝
裏表紙・島の毎日／ワックスパステル＋オイルパステル 520ミリ×730ミリ／福田 勝

Staff
Producer 加藤英世
Chief Editor & Art Director 福田 勝［絵と描き文字すべて福田 勝 作］
Editor 生江有二
Writer 寺田昌弘 佐藤貴美子
Photographer 小松勇二 ブルース・オズボーン 宇津 孝 宮川ゆき乃 小林修一 友永成大 榊原透雄 澤部 恵 松永正治 吉井信秋
Designer 平澤美恵子 諏訪弘幸
Map ジェオ 財団法人日本水路協会
Special thanks 小笠原村観光協会 母島観光協会 小笠原村 小笠原海運 東京都 東京大学付属植物園 サトウハチロー記念館 財団法人リモート・センシング技術センター

2001年7月25日発行
発行 株式会社マガジンハウス 〒104-8003 東京都中央区銀座 3-13-10 TEL03-3545-7007
印刷 凸版印刷株式会社 〒174-8558 東京都板橋区志村 1-11-1 TEL03-3968-5552
株式会社翔美アート 〒113-0033 東京都文京区本郷 2-17-2 廣和ビル TEL03-3818-6161



低く垂れ込めた雲の向こう、水平線が光る夜明け。①

にもたらす始まり。先人たちは火を起こし、湯を沸かしながら、無事にやってきた一日の始まりに感謝を忘れなかったはずだ。

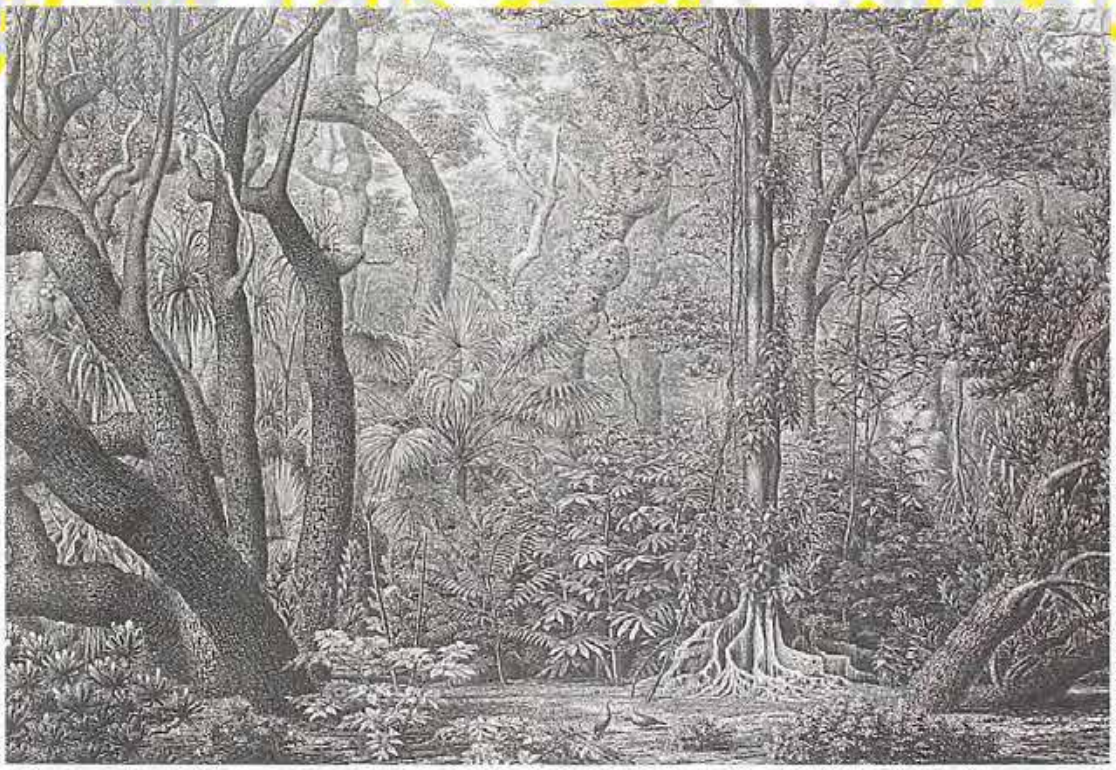
無人島であった小笠原に約20名の移住者がハワイからやって来たのが1830年。それまでこの島はボニンアイランドと呼ばれていた。ボニンとは「無人」が訛ったものだといわれている。

ランプに使用する鯨油を求めてノルウェーから始まった沿岸捕鯨は、やがて1年以上も洋上で過ごす米国式捕鯨に変わる。各国の捕鯨船はクジラを追って北極海を走りつくし、太平洋に目を注いだ。ペリーが黒船を率いて小笠原に姿を現した1853年、太平洋で捕鯨を行う船は1000余隻。そのうち、約700隻が米国の捕鯨船だった。小笠原は捕鯨の補給基地として、米英から熱い視線を注がれていたのである。

やがて捕鯨の波は小笠原からも消え、人々は農漁業の生活に力を入れるようになる。ときならぬサンゴブーム。値の良かったサトウキビ栽培。その後は蔬菜作りが島の自慢になった。やがて戦火が島を覆い、人々は島を離れざるをえなくなる——時はさまざまな形となって流れたが、人々は夕焼けの海を見て辛苦を癒し、夜明けの山々を見て奮起を促してきた。ライク ア ローリング ストーン。転がる石のように。小笠原の歴史は今もゆったりと作られ続けている。

島の人々も目を見張る夕焼けがやって来た。①

鯨が群れ、濃密な野性が息づく島に170年前、ハワイから約20名の移住者がやってきた



キトリッツの描いた銅版画。濃密な自然に圧倒される。

ロシアの鳥類学者キトリッツは1828年、軍艦セニアウイン号に乗って小笠原にやってきた。上図はそのときに描いたエッチング（銅版画）の一枚である。小笠原が手つかずの濃密な自然に溢れていたことがよく分かる。

小笠原は1593年、信濃国（現長野県）の城主だった小笠原貞頼によって発見されたと伝えられている。その後、江戸幕府による探査が行われるが、小笠原に注目したのは各国の捕鯨船だった。小笠原の近海には当時から鯨が多く遊弋（ゆうよく）し、これを追う捕鯨船によって各島の存在は知られていた。1830年、これらの捕鯨船に薪、食糧等の補給を行う商いをするため、ハワイからナサニエル・セボレーはじめ5名の欧米人とサンドウイッチ諸島（ハワイ）の住民15名ほどが父島に上陸。初めて小笠原は有人の島になったのである。1853年、米国ペリー艦隊が日本に通商を求める前に、二見港へ来航。牛、山羊などを島に放っている。その8年後、江戸幕府の咸臨丸、朝陽丸は小笠原に向かい、38名の開拓者を上陸させた。このとき、先住の欧米人らと交渉に当たったのがジョン万こと中浜万次郎だった。当時の記録には「十九軒、三十七名」の島民がすでに暮らしていたとある。

1870年代の父島大村・先住者チュークラブ宅前。

ジョン万次郎　本名中浜万次郎。元は土佐清水の漁師。遭難して鳥島に漂着。米国捕鯨船に助けられ、米国本土で英語を修得。幕末、各国との交渉で翻訳・通訳を行う。咸臨丸で来島した。

島ビトの足。ハワイ型カヌー。ハスノハギリ製。

マッソー・C・ペリー　米国東インド艦隊司令官。1853年（嘉永6）5月8日、日本に開国を求める航海途中、小笠原に寄る。石炭や水の補給拠点としたいと考えていた。

父島大村西町大通り、運送店前。明治中期。

ウィルソン・セボレー一家と住居。大正後期の父島・奥村。

開拓当初の小笠原ではウミガメの加工など、食糧になる作物中心の産業しかなかったが、1885年（明治18）から綿花栽培が普及。明治後期になってインド綿が輸入されるまで、島の主要作物になっていく。さらにサトウキビ栽培が始まると、耕地は拡大し、人口流入も続いた。

水産業では捕鯨が主要産業になると思われていたが、灯油に石油が使われるようになってから、諸外国の捕鯨は衰退。小笠原でも捕鯨要員をはじめ、捕鯨船なども不足し、その後再び発展するのは大正半ばになってからである。代わってカツオ漁および鰹節製

明治新政府は1876年（明治九）、世界各国に小笠原が日本の領土であることを通達。同時に役人を含めた48名を入植させた。入植者たちは慢性的な水不足や、赤茶色をした小笠原特有のラテライト土壌を、いかに肥沃な田畑にするかに苦しんだ。それでも翌77年（明治10）、一年に3便の定期航路が開かれ、翌78年（明治11）には欧米系人を含め、島民は252人に増加。父・母島の耕地面積は55町歩（約55ヘクタール）にまで広がった。

造が大々的に行われ、本土に出荷する主要水産物になっていく。

農業ではバナナ栽培が急速に広がり、サトウキビと出荷額を競うほどになる。が、1912年（明治45）、萎縮病が蔓延し、全島でバナナが全滅する被害に遭う。大正時代に入って回復するが、その間に観葉植物が脚光を浴びるなど、懸命の努力が続けられた。こうして産業が拡大するに従い、島内人口は飛躍的に増え、大正になると5000人を突破する。これは現在の人口（約2400人）の倍以上にあたるが、太平洋戦争終期の全島疎開（1944年）まで、常時、50000～60000人の人々が南海の島で暮らしていた。

〈ボクが小笠原の父島にいたのは一五の一〇月から十六の三月はじめまで……この五ヶ月の間にボクは詩を書き始めたのです。島の風物と友だちが、ボクを詩人にしてしまったのです〉

大正時代、父島・洲崎に東京府が設立した少年更生施設があった。詩人サトウハチローもこの施設に送られ、島の生活を送ったが、素朴で美しい詩を残している。

〈口笛で　あほう鳥を呼ぶリーチ
ズボンのつぎは　イギリスの形だった
パパイアに　かぶりつくクリス
髪の毛はパパイアの中身と　同じ色だった〉

施設での厳しい規律や学習よりも、豊かな自然の中で出会った欧米系の少年少女たちとの交流が、サトウハチローを詩に導いたのだろう。

昭和に入るとサトウキビ栽培は原糖価格の下落等で衰え、代わって内地（本土）向けの野菜作りが盛んになった。まだ温室栽培が普及しない時代、あたたかな小笠原では冬季にもトマト、キュウリが収穫できる。西瓜は2月から出荷が可能で、なかでもカボチャは大量に植え付けられ、定期船の積み荷の大半がカボチャで埋まる日々が毎年のように続いた。

カボチャの収穫期が過ぎると、家を新築する農家が多かった。島のそこここで見かける新築の家を見て「カボチャ御殿」という言葉が飛び交ったのもこの頃のことだ。今も当時のカボチャ畑が亜熱帯林の中、埋もれるように残っている箇所がある。多くが急峻な山の南側斜面を切り拓いており、畑に至る道は道と呼べないほど狭く、急で滑りやすい。現在のように耕運機もトラックもない時代である。人々はカボチャを40キロほど背負い、急な道を下りると、港まで歩いて運んだという。「カボチャ御殿」は、島民が身体を酷使した末に出来上がる、誇りと忍耐の象徴だった。

しかし、戦雲が島を覆い始める。硫黄島と共に小笠原も要塞化が進む。父島には網の目のように地下壕が掘られ、随所に監視所や砲座が設けられた。今も島には当時の戦跡があちこちに残り、戦跡を巡るツアーが行われている。

サイパン島に米軍が押し寄せた1944年（昭和19）、小笠原の全島民に疎開命令が出る。兵士と一部の男子島民が残る島に、間断ない空襲があり、米軍の上陸は必至と思われたが、沖縄が陥落し、やがて戦争は終わった。

敗戦直後の1946年、欧米系島民にだけ、帰還が許された。内地の各地で、容貌の違いから辛い疎開生活を送っていた人々120余名は一斉に島へ帰った。米軍は帰還島民にカマボコ型兵舎を宿舎として提供。島の戦後は共同生活から始まった。

ザトウクジラの解体作業。父島。大正末期。

タコノキの並木道。

日本聖公会小笠原島教会所を後ろに。牧師宅。

母島・山間（やまあい）の農家。ココヤシが立つ。

母島・桑ノ木山のウドの大木。

小笠原産バナナとタコノキの実と子供たち。

正覚坊と呼ばれていたアオウミガメと島の少年。

1968年。小笠原返還当時の聖ジョージ教会。父島大村。

明治中期から大正にかけてサトウキビ栽培は農業の要だった。

昭和の初め頃。父島大村のメインストリート。

米軍統治時代のカマボコ兵舎。帰島した欧米系島民が住んだ。

「私の家は疎開している間、日本の海軍司令官が使っていた。そのため帰還した際も家は残っていたのよ」

甘夏、橙、レモン、オレンジなど、たくさんの柑橘類が植えられている大平京子の家。入口近く、弓なりになって伸びるココヤシ。庭に作った畑には収穫寸前のトウモロコシにトマト。樹木に囲まれた家は、涼しそうな平屋造りである。

「だから帰島後はカマボコ兵舎で共同生活をする必要がなかったの。この家の天井板だけど――」

島々が揺れる。⑦

大平はオレンジの皮を剝きながら、天井を指さした。

「これはね、カマボコ兵舎で使っていたベニヤ板なのよ。兵舎を解体するとき、主人がたくさんもらい、船でここまで運んだの」

大平は1944年の集団疎開、それに46年に行われた欧米系住民の帰島を静かに話す。島に帰った島民の起居は、駐留米軍の使用するカマボコ兵舎だった。数家族が共用するため、ベニヤ板で間仕切りをした。やがて、それぞれが家を持つようになり、ベニヤの間仕切りは不要になっていった。その板を利用して天井を張り替えたというのである。

「津波のときは大変だったのよ。ドラム缶がごろんごろん音を立てて流れていくし」。島の歌い手、大平京子の"津波話"は続く。⑧

招き入れられた部屋はリビングルームでなく、本来はキッチンハウスだという。欧米系住民の家庭では、最近まで調理場が独立していた。炊事の煙が居間や寝室にまわらず、食べ物に誘われて侵入する虫が生活に邪魔にならないようになど、衛生上の問題からだと話す。流しの横にある窓から、風に揺れる大きなレモンが見えた。

「ここに住んでから津波に襲われて、大変なことがあった」

1960年、チリ沖で発生した海底地震は、うねりとなって太平洋を越え、日本を襲った。大平京子は目の前の海が突然引き始めたため、波打ち際まで行って水平線を眺めていたが、やがて大きく盛り上がる波を見た。

「あわてて家に戻ったら、すぐに波はやってきて、母屋は流され、このキッチンハウスも、おなかあたりまで水に浸かったわ。下の子供はおぶり、上の2人はテーブルの上にのせて、海水が引くのを待ったのよ。その後、警報解除を丘で待ちながら、小型ラジオから流れる歌を聞いていた」

太陽が揺れる。⑥

音を立てて転げるドラム缶。ひっくり返って流れるタンス。潮が引いた後は見る影もない惨状だったが、島の人々は奇跡的に無事だった。

大正10年生まれの大平京子は、唄が好きだった。島に伝わる「ウラメ」「ウワドロ」「丸木舟」などを好んで歌った。戦後も「東京ブギウギ」が内地で流行っていると知ると、港に入った船の船員に乞うて、唄を教えてもらったりした。小笠原の返還を聞いて唄も作っている。

「昭和43年6月に、ようやく島が日本に返還になる。それを聞いたときは嬉しくて、一晩で唄を書いた」

戦いが行ちる。⑦

「小笠原返還音頭」は8番まである長い曲だ。

願い叶って返還来る
さぞや皆さん　さぞや皆さん
うれしかろ　うれしかろ
さぞや皆さん　うれしかろ
トヨイト　トヨイト
ヤレコノセ

日本―米軍統治―日本と為政権が変わるたびに、大平京子の名前と生

野生が行く。⑦

ヒトビトの生々

宮川典継 写真左から
①47歳②東京・伊豆大島③28年④会社経営⑤地球を見る。PLANET VIEW.

宮川なみ
①15歳②父島④小笠原高校通学⑤外国に住みたい。オーストラリアかニュージーランド。

宮川ゆき乃
①43歳②神奈川・横浜③25年④写真家⑤家族そろって旅行したい。平屋の家に住みたい。Ⓑ

滝沢 浩
①55歳②埼玉③22〜23年④彫刻家⑤健康。Ⓑ

坂入祐子
①49歳②神奈川・横浜③父島5年、母島2年、内地16〜7年、現在母島7年目④母島観光協会勤務⑤うわ、おもしろかったなといって死にたい。できれば母島で。Ⓕ

友永成太
①52歳②北海道③15年④写真家⑤山にユートピアをつくる。

友永久子
①43歳②埼玉③5年④ショップ経営⑤楽園の島に楽園をつくる。Ⓑ

木村ケン
①54歳②父島④防衛庁海上自衛隊勤務⑤宝くじ。Ⓑ

梅野圭一 写真左から
①48歳②熊本③5年④東京電力母島発電所⑤畑を買って週末家族ですごせる小屋をつくりたい。

梅野なぎさ
①9歳②神奈川・藤沢③5年④母島小学校通学⑤島でお菓子屋さんを開きたい。

梅野ひろみ
①37歳②埼玉③5年⑤家族のおもい出をつくりたい（娘は中学を卒業したら母島を出なければならない）。Ⓕ

松原邦雄
①43歳②静岡・清水③16年④自然観察山岳ガイド⑤息子2人（10歳と6歳）が小笠原の自然の中で感性豊かな人間に育ってほしい。Ⓣ

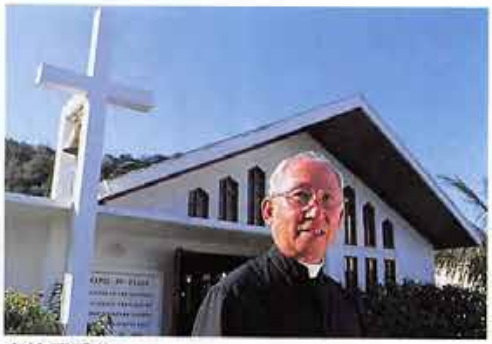
河野 徹
①66歳②母島③11歳から42歳まで内地④漁業⑤漁業組合を活気づけたい。Ⓕ

①年齢 ②出身地 ③島歴 ④仕事 ⑤夢があったらきかせてください。

ヒトビトの生々

大平ウォーリー
①51歳②父島④父島支庁・自然公園パトロール⑤もっと小笠原の自然を大切にしてほしい。Ⓑ

池田光生
①55歳②千葉・行徳③3年④父島小中学校校長⑤自然とかかわれるような学校をつくりたい。Ⓑ



小笠原愛作
①70歳②父島④聖ジョージ教会牧師⑤小笠原に来て父・母のすがたを見てください。Ⓑ

重田貴代
①27歳②福井③4年④イタリアンレストラン勤務⑤店を定着させたい。きちんとした料理を食べてもらいたい。Ⓑ

西本 誉
①38歳②香川・直島③4年④母島観光協会勤務⑤自分の土地が欲しい。

西本晃子
①30歳②茨木・水海道③4年④フリーター⑤仲よくずっと暮らしたい。Ⓕ

松永正治
①29歳②東京・板橋③6年④写真、レモン栽培、ガイド、漁の手伝い、大工、内装、民宿送迎、レンタルバイク整備・修理、など⑤写真で生活したい。毎日ちがう夕日を人に見せてあげたい。Ⓕ

井ノ口栄美
①20歳②神奈川・横須賀③2年④小笠原海洋センター・ボランティア／大学生⑤地球が好きです。カメも好きです。Ⓑ

木村ジョンソン 写真左から
①52歳②父島④小笠原水産センター勤務⑤金をかけずに農作物をオオコウモリの被害から守りたい。

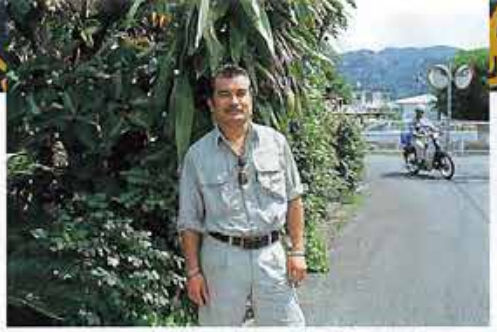
野沢テディ
①48歳②父島④小笠原水産センター勤務⑤夢？　ないよ。(笑) Ⓑ

①年齢 ②出身地 ③島歴 ④仕事 ⑤夢があったらきかせてください。

ヒトビトの生々

中山えみ

①22歳②神奈川・横浜③1999年から行ったり来たり④小笠原海洋センター・ボランティア⑤海の仕事を続けて海を守ってゆきたい。Ⓑ



香川和治(通称・ジュニア)

①44歳②父島③20〜27歳まで東京④会社経営⑤島がこのままじゃ死ねない。Ⓑ

横田啓子

①34歳②神奈川・横浜③3年④父島観光協会勤務⑤島がいつまでも生命を誕生させ育んでくれる島でありますように。Ⓑ

横山智佳子 写真左から

①44歳②神奈川・横浜③28年④母におなじ⑤本に囲まれて暮したい。

横山キヌ子

①65歳②神奈川・横浜③28年④飲食店経営⑤ゲートボールで全国優勝。

相沢さとみ

①15歳②父島④父島高等学校通学⑤高校を卒業すること。東京へ行きたい。Ⓑ

千葉勇人

①40歳②宮城・栗駒③18年(父島12年、母島6年)④小笠原村役場母島支所勤務⑤属島全部に渡って島の調査をしたい。Ⓕ

平田典久

①47歳②東京・江戸川③15年④ドーナッツ&クレープショップ経営⑤小笠原ならこれだ、という食べものをつくりたい。

川越法子 写真左から

①33歳②東京・足立③4年④ベイカリー&ショップ勤務⑤小笠原からもらうパワーをアクセサリーで表現したい。

小島真季

①30歳②神奈川・川崎③12年④ショップ経営⑤1年の半分は旅行していたい。いろいろな世界を見たい。

野勢もとみ

①32歳②東京・大田③4年④農業・造園⑤観光農園をつくりたい。Ⓑ

東山 誠 写真左から

①51歳②北海道・夕張③9カ月④警視庁母島派出所勤務⑤退職後島に戻り剣道場をつくりたい。

湧泉勝二

①46歳②宮城・栗原郡③1年3カ月④警視庁母島派出所勤務⑤大物を釣りたい。Ⓕ

①年齢 ②出身地 ③島歴 ④仕事 ⑤夢があったらきかせてください。

小笠原に伝わる南洋踊りは、島に伝わる古い唄に合わせて踊る。歌詞は非常にミステリアスである。

ウワドロ　フィ　イッヒヒ　イッヒヒ(繰り返し)　ウワドロ　フィネミネ　ウエゲル　ガ　アーラーレンガ　リアツウ　グラー……(「ウワドロ」)

南洋踊りはこのほか「ウラメ」「夜明けまえ」「ギダイ」「アフタイラン」の5曲を歌いながら踊る。

「踊っていても、この歌詞は何を意味して、どこから来たものなのかがまったく分からなかった」

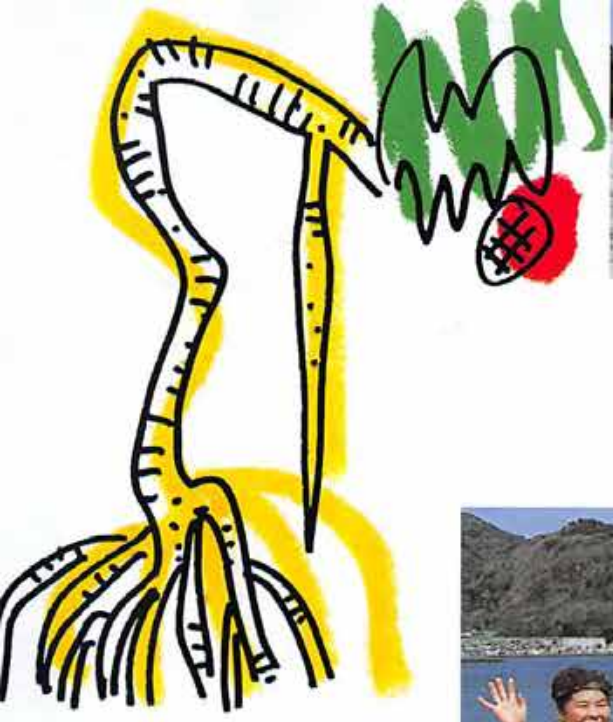
母島の発電所に勤める小高堂義(65歳)は、発電機のうなりの中、大声で話す。25年前に小笠原にやってきた。

「この島を紹介するのに、誰もが納得し、島の生命力に溢れ、自覚を持っていただけるものはと思っているとき、南洋踊りを知った」

大正末期。欧米系島民のジョサイヤ・ゴンザレスが、サイパンに出かけた際に唄と踊りを覚え、伝えたといわれている。やがて島の青年学級の中で踊りは広まり、母島にも伝えられていった。

数年前。小高が内地に出張したときのことだ。神田の古本屋で運命の

波のようなリズムの踊りが続く。もともとはヤップダンスのように、男だけが参加する踊りだったようだ。現在は保存会が組織されている。



ダンス小笠原

Dance,Bonin

大正時代に伝わった南洋踊りの不思議な歌詞は、一夫多妻制の時代を匂わせるカロリン諸島の古い唄だった。

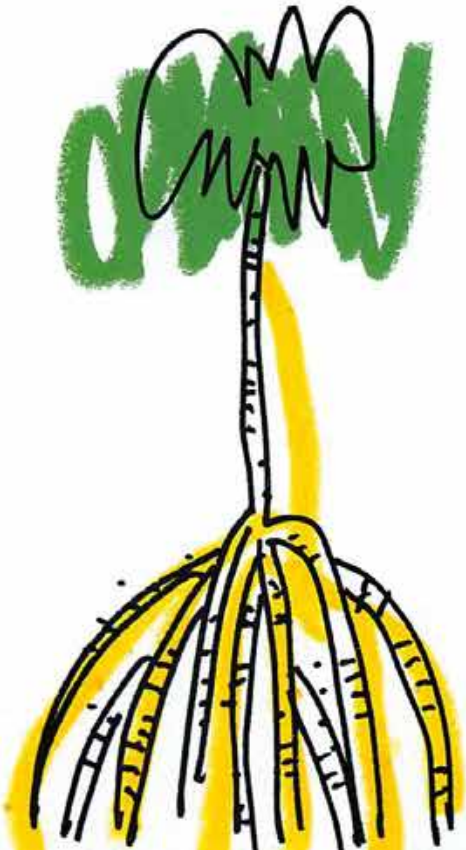
文／生江有二　写真／小松勇二

男はセボレーヤシの葉を腰に巻く。「父島では最近、ドーランを塗らなくなったが、母島の南洋踊りは伝統を重んじて塗ります」（小高代表）。

本と出会った。昭和3年刊『中央カロリン語の研究』（松岡静雄著）。そこには「ウワトロフィ」の歌詞が載っていた。

ウワトロフィ　イ、イ、イ、イ、イ（繰り返し）　ウワトロフィ　レミン　メレブゴ　ン　アラレン　ガリ　ウエチグラ……（つかまえた　つかまえた　新妻を道でつかまえた）

ポナペ、パラオなどミクロネシアの島々をカロリン諸島と総称するが、かつて存在した一夫多妻制の習慣が色濃く滲んだ唄である。1999年（平成11年）、南洋踊りは東京都の文化財に指定された。小高は南の島々の往来を知る素朴なこの唄と踊りを、いっそう広めようと、からだ中にドーランを塗るのである。



メイド・イン・小笠原

島のものを加工して生計を立てようと努める人がいる。趣味を見つけて長い島の時間を楽しもうとする人がいる。その人たちの技を見た。

文／生江有二　写真／小松有二　友永成太

船津ジョエンが編む、軽くて柔らかな逸品
――サイザル麻の小物入れ

「ほら、あの電柱の下に生えている冴えない草があるでしょ。あれ、シロノセンダングサというの。草木染めに使うと、きれいなレモンイエローに染まるのよ」。

船津ジョエン（主婦）は草木染めのベテランだった。シマシャリンバイは使う量でオレンジ、もしくはサーモンピンク。葉と茎を使うホナガソウは渋い黄色。ハイビスカスは青だが、色がさめやすい――。

サイザル麻はすぐに分かった。少し乾燥した土地に、剣のような青緑色をした葉を勢いよく伸ばしている。図鑑で調べてみるとリュウゼツラン科の多年草でメキシコ・ユカタン半島の港町シザルから名付けられたとある。

「私も図鑑で知ったのだけど、ツメでしごくだけで繊維は簡単に採れるのよ」

固そうな葉だが、アロエのように厚い葉肉の中に、50本以上の繊維が詰まっている。ためしに繊維を引っぱってみたが、細い丈夫な繊維が簡単に採れた。葉と同じ長さの繊維が、いくらでも採れるのだ。

ジョエンはこれを水洗い後、陰干し。3、4本を1本に撚り合わせる。

「編み物が好きで、セーターなどを編んでいたけど、島はあたたかいからウールを着るときがない。サイザル麻は硫黄島で大量栽培の記録があったので、父島で探してみたら、あちこちに自生していた」

子どもの帽子を最初に編んだ。麻だから軽くて涼しい。そのうち、小物入れやショルダーバッグができた。草木染めでパステルカラーのような色をつけたジョエンの小物入れは、島の女性たちに静かな人気を呼んでいる。

左／ジョエンが背にするタコノキも、その葉をいくつもの工程を経た後に、編工物に使用する。ジョエンは返還後、トモ子と改名したが、数年前から本名を使うようになった。下／淡い色が南洋らしいサイザル麻の小物入れ。

平京子さんを訪ね、お話を聞かせてもらうことに。

緊張している私に、大平さんは、とっても気さくに話をしてくださいました。島にまだ娯楽がない時代、ひっぱり出されて歌を歌っていた事、返還の時には、昔の友人に会えるのが嬉しくて思わず歌を作ったという事、そして戦争時代の話、小笠原で生まれ育った大平さんの波瀾万丈な人生に、私は感動し、そして、笑い転げてしまいました。そこで、思わず、忘れそうになっていた本題を思い出し、小笠原古謡について、質問すると、「あのねー私は歌っていただけでよく知らないのよ」とおっしゃるではないか！ 私の青ざめてゆく心が見えたのか、大平さんは、おいごさんにあたる、瀬堀エイブルさんなら分かるだろうと、言ってくださり、「明日、波がなければゲートボール場に来るから」「え!!」と私。「波があるとサーフィンに行っちゃうのよ」と、あっさり。なんでゲートボールをする人がサーフィンやるんだよー。この島はいったいどうなってるんだ？ と思いつつ、昼の間に南洋踊り（これも不思議）の練習を終え、ゲートボール場へ向かいました。

「いた！ よかったー」とあいさつもそこそこに質問開始。するとエイブルさんは、「パラオの5丁目」「レモン林」「おやどのために」の3曲をサイパンのカフェでパラオ島民に教えてもらい、エイブルさんが島に伝えたという事、そして、一時歌われなくなった時期を経て、返還を機に、また島の人々に歌われるようになったと話してくれました。「レモン林」の歌詩について聞くと（その意味もとんでもなかったのですが……）、「それはねー、替え歌なんだよ」というではないか。「もう録音しちゃったんですけど」と私。そこに来てくれていた大平さんも「あらら！大変」。そして、「みんなこの歌詩（替え歌）が本当だと思ってるから」と二人に慰められる始末・ホ・ホ。

二人に勧められ、「南洋踊り」について聞くため、聖ジョージ教会の牧師様、小笠原愛作さんを訪ねる事に。

突然の訪問と、私のせっぱ詰まった表情に、少々驚いたご様子でしたが、私が質問すると、とても親切に答えてくださいました。戦前、牧師様のお父様が南洋の島々を旅した時に踊りと共に島に持ち帰り若者たちに伝えたという事、しかし、やはりここでも言葉の意味については、分からなかったのでした。「丸木舟」については、もうそれを伝えた方は亡くなられている。結局、この旅で私の知ろうとしていたことは、ほとんどわからなかった……。島から戻り、アルバムの仕上げを始めた頃、ふっと思ったのです。「私は、いったい何を探していたのだろう」。3度の旅の間に出会った島の人々の中に、そして、素っ裸のあの島の自然の中に、このユーモアに満ちたラブソングはピッタリ寄り添っていたではないか。そして、それは、旅人の私にもしっかりと届いていた。私達の小笠原古謡集は完成し、島の人達も心よく受け入れてくれました。そして再び島の人達の力によってリングリンクスは小笠原へ、父島、母島の両島でコンサートを開く事ができ、初めて行った母島では、さらにその気持ちを確信しました。そう、この歌たちは、今、この島に生きる人達にピッタリなのだ、ワイルドでロマンチストなこの島に！

私は、すっかりこの島に恋をしてしまったようです。いつまでも歌と共に、この島に寄り添っていたい。

雨／ワックスパステル＋オイルパステル　728ミリ×520ミリ／福田 勝

みやたけ のぞみ／少女時代からの拳法修行をいかし、小劇場の舞台を経験しながら女優としても活躍。初めての自作曲、春のような を歌い始め、一カ月目にリングリンクスのボーカルとしてデビュー。人々の心にホッと安らぎをあたえるボーカルは、各方面から高い評価を受ける。

小笠原女子力

取材／横田紀一郎
文／寺田昌弘
写真／小松勇二

ハイブリッドカー　トヨタ・プリウスは小笠原が似合う。

Native Spirit,Bonin

彼女たちの笑顔はどこから湧き出てくるのだろう。
彼女たちの手は、これから何をつかむのだろう。
そして21世紀も持ちつづけていきたい、人の心とは…。

小笠原海洋センター

島の人たちの"協力"する心を甲羅に背負い、大海原に旅立つ100頭のアオウミガメ。

村を挙げてのお祭り当日、アオウミガメの放流が行われた。島民、観光客がそれぞれ子ガメを持ち、いっせいに海へ向けて放す。人は一生懸命這うアオウミガメから、命の大事さ、海の大切さを学ぶ。

1頭ずつ甲羅の長さ、幅、模様そして体重を量ったら、足にチタン製のタグをつける。これが名札になる。

海洋センターの玄関。中にはたくさんの資料が壁に貼られている。

「これからの地球はどうなるのか」。そう思って2年前から北米、欧州、西アフリカを旅した横田紀一郎氏。氏は30年、100カ国以上を巡った体験をもとに、現在人間と自然との関係をテーマに旅を続けている。そんな氏が日本で興味を持ったのが父島。亜熱帯の自然、野生が息づくこの島では、人と自然がどのようにバランスをとっているのか。素朴な想いをナビシートにのせ、プリウスで巡る。

20年後を夢見て放すアオウミガメの子供たち

インドネシアのタイマイ、メキシコのヒメウミガメと並んで絶滅の危機に瀕しているといわれる、小笠原のアオウミガメ。このカメを保護し、繁殖、放流している人がいる。山口真名美さん。彼女は13年前から、ここでアオウミガメとザトウクジラの調査をしている。

学生時代、マウイ島へ留学していたときにザトウクジラに興味を持ち、研究センターのアシスタントをしていた。そこへ日本のテレビ局がクジラの生態を追う取材にきて手伝いをしていたら、今度は小笠原でも取材をするので手伝うことになり、この島へ来た。以来、自分の経験と興味をいかせるものとして海洋センターで働くようになった。

「最初はボランティアで手伝っていましたが、バイトの空きができて働くようになりました。今では一番の古株になってしまいましたけど」

毎年10頭のアオウミガメを漁師から分けてもらい産卵、孵化させる。

子ガメたちが島に戻ってくる20年後も、このままきれいな島でいてほしい。

所長の山口さんのもとには、仲間が集まる。この日もアメリカから国立海洋漁業局のサリー・ミズロフ博士が遊びにきていた。

毎年若いボランティアが集まり、カメを育てる。

そして半年近くセンター内の水槽で保育し、体長が20cm近くまで育ったところで海へ放流する。この日も100頭の子アオウミガメが、大海原へ旅立った。アオウミガメの回遊域はまだ定かではない。そこでアオウミガメの足にチタン製タグをつけてから放流する。1頭ずつ体重、体長、甲羅の模様をボランティアの若者たちが記録しているのが印象的だった。

「このカメたちが、産卵でこの島に帰ってくるのは20年後ぐらいなんです。毎年、孵化、放流を繰り返し、どこかで発見されたという情報が入ってくると、ほっとしますね」

動物保護活動に重要なことは、保護を訴えるのではなく、広く公開し、協力を得ることだという。漁業関係者、島民、観光客。みんなが協力してアオウミガメを育てる。それが父島のいいところになってきている。

それを聞いて横田氏は、

「まず人と人がうまくいかなきゃ、カメとだってうまくいかないんじゃないかな。山口さんは、マウイ仕込みのフラダンスを父島風にアレンジし、島の子供たちに教えているところがさすがだよね。放流したウミガメたちも両手を広げてフラダンスしてるみたいに泳いでいったね」

二見港付近は夜間照明用電源にソーラー発電を使う。

亜熱帯農業センター

昔、冬野菜。今、果物。島の気候、風土を生かし、「メイド イン 父島」の野菜や果物作りに賭ける。

本土よりも大きく育ったセロリをかじる横田氏と朝長さん。清涼感と深い苦みの奥に朝長さんの熱意を感じた。

亜熱帯気候の中、さまざまな熱帯果樹が育つ。

花き、熱帯果樹、野菜などの研究部門がある。

亜熱帯に実るのは、人の情熱とパッションフルーツ

小笠原は、農業で繁栄した時代があった。温室やハウス栽培など存在しない昭和初期から、亜熱帯の暖かい気候を利用し、冬に野菜を作った。最盛期には、農家1軒あたりの年所得が、当時の内閣総理大臣の年収より高かったそうだ。それも今は昔。農地の大部分がギンネムの木で覆われ、現在父島では約24戸の農家がトマトや果物などを中心に農業を営む。なかでも一番生産高の多い果物が、パッションフルーツ。そのルーツを見ようと島のほぼ中央部に広大な敷地を持つ亜熱帯農業センターへやってきた。

所長の朝長信次さんは言う。

「昔の人たちは小笠原の気候を生かし、かぼちゃなどの夏野菜を冬に作ったりした。夏野菜という言葉はよく聞くでしょうけど、冬野菜ですから。その発想と情熱に感心しますね」

現在島の主要農産物はパッションフルーツ。ブラジル南部、アマゾン原産のパッションフルーツが、台湾で改良されて父島に入ってきた。以来、島に合う果物として栽培されてきた。そして朝長さんは、温室に頼らず露地栽培で育てるセロリや、新たにマンゴーなど、本土では栽培しにくい亜熱帯特有の果物にチャレンジしている。

「本当の野菜の味、太陽を燦々と浴びて育った野菜は、ものすごくいい香りがするんですよ。こんな本物の野菜を作ってみたいし、いっぽうで生産性を上げる試験や付加価値の高い果物を作るなどして、農業生産のサポートをしていきたいですね」

村に住む人の中には、コーヒーの木を育てている人もいる。そこで収穫された豆を焙煎し、ボニンコーヒーのネーミングで、売り始めている。この島ならではの特産物づくりに熱心に取り組んでいる。実際、横田氏もこのコーヒーを飲みにいった。

「独特で深みのある味がしたよ。父島に来たら、このコーヒーが飲める。こんなセンスってすごい贅沢でいいよね。オリジナルにこだわるって重要なことだと思うよ」

農家の人たちは、毎年パッションフルーツを収穫する。しかし朝長さんが今頑張って栽培している農作物は、毎年多くの実をつけるが、これが本当の収穫時期ではない。10年、20年先、この島だから作れる最高の農作物づくりに成功したとき、初めて収穫されるのだ。そのときまで、熱い情熱〝パッション〟を抱きながら。

トヨタ・プリウス。二見港にて

シーカヤックで、のんびりビーチめぐり

⑮ ブルースカイ・ビックホース

ブルースカイ・ビックホースという名前から想像がつくように、ここでは少し前まで乗馬体験ができたが、馬は出産準備のために一時休業。いまはシーカヤックをメインに営業しているそうだ。「シーカヤックに乗れば、ジョンビーチやジニービーチまで30分足らずで行けますよ」とオーナーの相馬治郎さんがさわやかな笑顔でいう。島の南西にあるジョンビーチ、ジニービーチへ行くには、険しい道を2時間近くも歩かなければならない。コペペ海岸からシーカヤックで行くほうがずっと効率がいいし、そのまま南島へ行くことも可能だ。

コペペ海岸からカヤックで行けば、ジニービーチまで約30分だ。

治郎さんはシーカヤックをはじめ、ジェットスキーやウエークボードなどのマリンスポーツを得意とするスポーツマン。島恒例の相撲大会では2年連続優勝している"力持ち"でもある。一方、奥さんのみどりさんも腕相撲大会で優勝した経験があり「腕っ節の強さではどこにも負けません」と笑いながらいう、元気で明るい夫婦だ。

また、治郎さんはアート面でもすぐれた才能の持ち主で、彼の描いた砂絵で作られたオリジナル土産も観光客に好評だ。なかでも携帯電話を砂絵アートで飾るサービスは、ネールアート世代に人気。希望者は携帯電話を一晩預けなければいけないが、一度張り付けた砂絵は3～4年は落ちないそうなので、小笠原へ来たよい記念になるだろう。

上／愛馬のメメちゃんとクリカちゃん（ともに雌馬）。乗馬は一時休止しているが、馬の見学はいつでもできるそうだ。左／オリジナルデザインの砂絵でケータイをアート。

☎04998・2・3884　オーシャンカヤック1日7,500円、半日5,000円（弁当、ドリンク、記念品付）。携帯電話への砂絵アートは5,000円～（電話預かり翌日渡し）〈map p.99-C〉

父島の花鳥風月を撮影しDVDソフトを全国発売

㉔ スタジオもののふ!

"もののふ"とは武士を意味する言葉。「小笠原を発見した人物といわれている小笠原貞頼が武士だったので、それに引っかけて名付けたんです」とビデオカメラマンの伊藤亜玲（つぐよし）さん。最後に"！"を付けたのは、伊藤さんの小笠原に対する強い思い入れの表れなのだろう。

小笠原に魅せられ10年前に移住した伊藤さんは、最初の数年間は父島農協の職員をしていた。趣味で島の美しい風景やめずらしい植物、海の生物などをビデオ撮影し、編集したものを友人たちに見せたら「おまえなら絶対にプロになれる！」といわれた。それから間もなく農協を辞め、プロビデオカメラマンに転職したのだという。

父島の豊かな自然を映像に記録。

「もともと乗せられやすい性格なんですよ」と伊藤さんは照れ笑いをするが、この仕事を始めて早3年目。いまはTBSの小笠原通信員の肩書も持ち、小笠原でイベント等があると伊藤さんの映像がニュース番組で流れることがある。友人のいうとおり、プロとしての素質を持っていたのだ。

今年、『スタジオもののふ！』は初のDVDソフト『～FINAL BLUE～小笠原イメージスケッチ』（2,980円　発売・販売：マニッシュ）を全国発売した。これまでにも父島の花鳥風月に洗練されたBGMを添えたビデオ『FINAL BLUE』シリーズなどを自主制作しインターネットで販売していたが、全国販売は今回が初めてだ。

幻想的で美しい小笠原の風景をはじめ、産卵を終えたアオウミガメ、澄みわたった海を優雅に泳ぐクジラやイルカ、カラフルな熱帯魚、そして絶滅が危惧されるクロアシアホウドリなど、小笠原の自然をリアルに撮影した貴重な映像が満載。島の動植物を知る資料としても利用できる。また、スタジオもののふ！では、DVDの第2弾として、小笠原の貴重な動植物の映像を満載した『小笠原レアアニマルズ（仮）』を鋭意制作中とのこと。（発売・販売、マニッシュ）

初のDVDソフトでは、約60分にわたって小笠原の貴重な映像が繰り広げられる

☎04998・2・3487　DVD『～FINAL BLUE～小笠原イメージスケッチ』2,980円、VHSビデオ『FINAL BLUE II』『小笠原花鳥風月』各1,800円〈map p.99-B〉

父島の夜明け道路を車で走っていると、野生のヤギが突然飛び出してきて驚くことがある。

陸も海も安心の気配りのガイド

⑳父島タクシー

父島では、島と本土とを結ぶ唯一の定期船・おがさわら丸が出港すると一斉にガイド船がそれを追いかけ、島を離れる人たちを見送る。この盛大な別れの儀式は何度体験しても感動的で、父島からどんどん離れていくおがさわら丸の中には、涙をポロポロこぼしながら手を振っている人も少なくない。

見送りに来た船はある程度のところまで行くと次々に島へ引き返していくが、父島タクシーの『ドリーム号Ⅱ』はたいてい最後までおがさわら丸を見送り続ける。他の船がすべて引き返し、最後の一隻になるまで手を振り続ける様子はとても印象的だ。「船と船長の調子がよければ、最後まで見送るように心がけてます」と船長の岡本武治さんはいう。

島の人から〝チチタク〟の愛称で親しまれている父島タクシーは、小笠原唯一のタクシー会社。タクシーでの島内観光や送迎をはじめ、レンタルバイク・サイクルなども多数用意し、観光客の陸での移動をサポートしている。そして海でのレジャーは『ドリーム号Ⅱ』が担当。父島のことなら、陸も海もたいていここに聞けばわかるのだ。

タクシーはもちろん安全運転だが、船の操縦もいたって穏やか。船体が大きく揺れないように慎重に進み、決して無理はしない。しかし、ドルフィンスイムやホエールウォッチングでは客が納得するまでイルカやクジラを探し、釣りでは大物が狙えるポイントまで案内する。また、ドルフィンスイムのとき乗船客がラクに船を乗り降りできるように、昇降口のステップを低めに付け替えるなど、ささやかながらもうれしい気配りが随所に見られる。小さな子ども連れや年輩者も安心して楽しめる船だ。

岡本さんをはじめ、スタッフは皆気さくな人ばかり。写真下はおがさわら丸出港時の見送りシーン。

レンタルバイクは台数・種類ともに小笠原で一番。

タクシーやレンタルバイク利用者は『ドリーム号Ⅱ』の料金が割引になるので、併せて利用するのもいいだろう。

☎04998・2・3311　ホエールウォッチング・ドルフィンスイム（半日4,000円、1日8,000円）、釣り15,000円〜（エサ、賃竿代別）、水中3点セット無料 〈map p.99-A〉

父島育ちの親子が海をプロデュース

㉑LITTLE GEORGE

小笠原の最初の定住者は、江戸後期に移民してきた欧米人とハワイ人だ。明治初期に日本領と認められたが、外国から来た先住民たちの血はいまも島に受け継がれており、父島で暮らす人々はエキゾチックな顔立ちが多い。『LITTLE GEORGE』のロバートさんジョージさん親子も、島へ最初に渡ってきた欧米系移住者の子孫だ。

島を離れ、しばらくは内地で暮らしていたジョージさんが結婚を機に父島へ戻り観光船を始めたのは、およそ1年前。それからは父親のロバートさんと一緒に〝親子船〟で父島周辺の海をガイドしている。

撮影の日はあいにくの悪天候で、話す言葉もうち消されるほどの暴風雨。こんな日に船を出すのは危険ではと心配したが、「海は凪だから大丈夫ですよ」と船長のジョージさん。反対に天気はよくても波のある日は、絶対に船を出さないそうだ。「以前、海を案内してたら急に波が出てきたので、お客さんを途中で下ろしたことがあるんですよ」と奥さんの亮子さんが話す。「このまま船を走らせたらお客さんが危険だと船長が判断したので、宮之浜に船を着けて。私も急いで車を出してお客さんを迎えに行きました」。小笠原で生まれ育ち、海のことや自然環境をよく知っている人間だから瞬時に判断できたのだろう。

東京でジョージさんと知り合い父島へ嫁いできた亮子さんも、今ではすっかり島の人。彼女が作った島産パパイヤの漬け物は『LITTLE GEORGE』の隠れ名物で、弁当と一緒にタッパーに入れて出すとアッという間になくなってしまうそうだ。

12人乗りの船はトイレ・簡易シャワー付き。チャーターすれば、島育ちならではのとびっきりの海の楽しみ方をプロデュースしてくれる。

欧米系移民の4代目ロバートさんと、5代目ジョージさん親子。『LITTLE GEORGE』は小柄なジョージさんの愛称だそうだ。

亮子さんは東京でジョージさんと知り合い、父島へ嫁いできた。

☎04998・2・3960　ホエールウォッチング・ドルフィンスイム1日8,000円、釣り乗合12,000円、サンセットクルーズ2,000円、チャーター60,000円〜 〈map p.99-B〉

大村海岸は、島の人たちに「前浜（まえはま）」とも呼ばれている。